

この人に聞く <sup>たなべ</sup> 田邊 <sup>ぎょうしょう</sup> 堯正さん

## 「社会科学に衣」

一人々の苦難と宗教者

編 集 部

### ◆田邊 堯正さん プロフィール

1935年、三島郡大津村大字蓮花寺（現長岡市）に生れる。

1959年、千葉県立安房第一高等学校教諭（定時制）として就職。

1961年以降、新潟県立西越高等学校、同第二長岡高等学校（現長岡大手）、同栃尾高等学校（定時制）に勤務、主として社会科（「社会」、「倫理・社会」、「政治・経済」）を担当。

1996年、定年退職。

1997年、真言宗豊山派法華寺住職就任、現在に至る。



### 地域に根ざして生きる―蓮花寺の法華寺

高校の教員を退職してからは法華寺の住職に専念しています。真言宗智山派の県内のある高僧が住職の仕事は「一に掃除、二に読経、三に時間があつたら読書」と言っておられました。一に掃除と言っても、境内まで含めるとなかなか行き届きません。

この寺は平安時代前期の制作とみられる釈迦如来座像を安置しています。それは、長岡市の指定文化財です。寺も古い歴史をもち、わたくしが六十一世住職です。寺から、おそらく千三百年位は続いているでしょう。

この蓮花寺集落は同様に歴史が古く、出雲崎海岸から直線距離にして約八キロメートル、縄文土器が出土する中世の山城、小木ノ城跡からは三キロの麓です。

二〇〇四年七月の中越大水害で寺の裏山が地滑りを起こし、本堂を直撃し秘仏のご本尊（如意輪観音）も被災しました。さいわい宮殿（厨子）に保護されていたのでほとんど損傷はありませんでした。

しかし、本堂はすべて改築しなければなりません。一億円を超える浄財をいただき、分水町の宮大工が棟梁をやって下さって、被災後三年でけやきの柱

や床を要所々に使い奥行きは前より三尺広くし、空調設備も整った本堂にしていたできました。

柏崎・刈羽原子力発電所から北東約十五キロメートルの地でもあり、福島原発事故は重大な関心事でした。

### マスメディアを糺す

昨年、TBSが制作して地元テレビ局BSNが放送した番組（三月十六日）の中で、山名元（京都大学原子炉実験所教授）は要旨、次の如く言いました。

「福島原発事故は、フランスではレベル6相当と言っているが、人的被害はでない。レベル6と5はたとえて言えば、銀メダルと銅メダル位のちがいが、レベル7は、はるか上でチエルノブイリでは原子炉が吹っ飛んだ。」

科学者の発言とは思えないので、メモをとっておきました。四月中旬になってレベル7に認められたが、その報道の責任を糺すために、質問書を書留でTBS本社に送りました。その要点は、次の三点。

- ①山名元氏のコメントのあった番組の制作責任者名。
- ②山名氏の発言の正確な内容を知りたい。それが出来ないならその理由。
- ③番組制作責任者か貴社の見解。

盆参会の法話の中で、「ウラボン」とは何かとにも、原発事故についてどうしてもふれたいと考えて、回答期限を七月三十日正午としました。しかし、梨のつぶてで返事はなかったのです。

八月一日の盆参会では次の点を強調しました。

「原子力発電が安全だなどという通説が、間違いだつた事が明白になりました。批判的な学者の意見のほうが正しかったわけです。」

私は太平洋戦争が始められた翌年、一九四二年四月に国民学校初等科第一学年に入学しましたが、戦争報道は「大本営発表」として伝えられていました。いまでは「大本営発表」のようだとはいえウソのことを意味しています。

マスメディアをかんとんに信用してはいけません。原発の『安全神話』を作ってきたことに反省がない。そのことを指摘して、事実について聞いても返事さえよこさないテレビ局です。電波は国民の共有の財産です。放送に疑問や不満があったら、意見や批判を言います。そうしないとマスメディアは権力や金力の側についてしまいます。通説を疑え・常識を疑え、自分の頭でしっかり考えていただきたい。」

## 『蓮花寺のこと、法華寺のこと』の出版

二〇一〇年に、地域の言い伝えや行事などをまとめた冊子を出版しました。私は編著者で、先輩の仕事が誰もが読めるようにしたつもりです。地域の皆さんが郷土にいつそうの理解や愛着を深めて欲しいと願うことです。

一九三〇年代に（昭和六年〜同九年）地元第一大津尋常高等小学校長の吉原正秀さんが、郷土の教育のためにガリ版刷りの数百頁にわたる資料集を作成しておいて下さったのです。

わずか七八年前の文章ですが、そのままでは若い人には読めないかも知れませんが、「蓮法図書館」に保存してあったのを原稿に起こしてパソコンが堪能な人が打ってくれました。著名な写真家も快く最適な作品を提供して下さい、伝説と写真『蓮花寺のこと、法華寺のこと』（A4判56頁）ができました。

幸い評判がよく、それをきっかけに、昨年の正月『蓮花寺集落の古い謂われを学ぶ会』が生まれました。その趣意は次の通りです。「郷土蓮花寺のことを、これからの若い世代に末永く伝承されて、自信と誇りを

持つてもらうために計画しました。」

発起人が自主的に呼びかけて学習会を開き、その一人が、二六ある集落の小字名の由来を報告し、私も専門ではないが、小木ノ城と縄文時代の人々の暮らしを話しました。その会は続いていきますし、将来、蓮花寺集落の通史がまとまることを願っています。

## セツルメント活動から得たこと

「僧侶なのに社会的な活動をよくやりますね」と批判的に言われます。私どもの宗派の教えからは社会的活動は当然のことなのです。檀信徒のみなさんにお配りしている『真言安心章』には「即身成佛と密厳國土の実現とをもつて、その究境の理想となす」とあります。

即身成佛とは、死後でなく現世で佛になるように生きるという意味です。宗祖、弘法大師の多くの逸話はそのことを表しており、唐で学ばれた最新の思想や知識で民衆の苦難を救おうと努められた生き方です。

放射能の危険があるならば、それに対処しなければなりません。高価でしたが、私も線量計を求めてお寺の周囲や裏山などで計って、必要に応じてみなさんに

知らせています。

密蔵國土とは、「身修まり、家榮え、國興りて和風世に普く、社会安穩なるを密蔵國土と名づく」ということです。今日の世の中を安穩にするには個人の働きと共に協同の力がいるのです。

そのことは大学時代に東京でセツルメント活動に関わったことで学びました。一九五〇年代の後半は今とはちがった戦後の貧しさがつづいていました。セツルメントとは学生が貧しい子どもらの住む地域に入って勉強を見てやったり、医学生なら健康面もみてやるなど、地域に定着して行うボランティアです。東大の駒場の学生は世田谷で主に活動しました。

私が大学に入学した一九五五年に全国セツルメント連合が結成され、翌年、情宣担当書記局員になり、『学生セツルメントの歴史』（ガリ版刷り）を編集しました。

『前衛』を読んでいる先輩も居り、田舎者の私は「こんな雑誌もあるのか」とびっくりしました。高校時代から哲学に興味を持っていたので、マルクスやレーニンの著作も読みました。「哲学者たちは世界をただささまざまに解釈してきただけである。肝腎なのはそれ

を変えることである。」というフレーズなど感銘したものです。

セツルメントの一年後輩に日隈威徳さんが居られました。学年も違ったし私は法学部第三類（政治コース）へ、彼は文学部印度哲学科に進まれましたので、大学時代は話し合ったという記憶はありませんが、日隈さんは大学院を出られてから鈴木学術財団で『梵和大辞典』の編集にたずさわったりした後に共産党中央委員会の宗教委員会責任者になり原水爆禁止、平和擁護など具体的な問題で宗教者と政党の協同を進め、私にも協力を求めました。世界観がちがっても、国民の切実な問題の解決に協同することは当然だからです。

日隈さんは、宗教と科学的社会主義の共通点は、生命を尊重し、庶民の具体的な困難を自らの問題とする、根源的ヒューマニズムであり、それが「相寄る魂」の哲学的基礎であると述べておられます。

### 戦争体験が原点

八歳の秋、本堂の前に置かれた火防用水溜が、打ち壊されてかます袋に入れられ、運ばれるところを今でも覚えています。兵器にするための金属類の供出でし

た。今から考えてみると、その無惨な様子を見たことが、戦争反対や平和の擁護の生き方の原点になっていると思います。寺は高所にあったので鉄製の大きなかめは壊さないと運べないのです。一九二二（大正二）年に地元の方々から寄進された立派なものでした。

一一歳の夏、八月一日当山恒例の盆参会が終わったその夜、長岡空襲で東の空が赤く燃え上がるのを見つめました。同宗門の大先輩、中村啓識大僧正は「九条を守る長岡の会」の代表世話人として、戦争と平和の問題で尽力されています。その空襲で父親を失われた体験がそうさせているのでしょうか。原発、ゼロにも賛同されていますし、わたくしも同様です。

### 大震災後、宗教の役割が問われる

雑誌『中央公論』五月号が「宗教は日本を救うか」という特集をしています。東日本大震災で死者一万五八五四人、行方不明者二一五五人の犠牲者。原発事故による被災者の苦難。これにどう向かうかは誰にも、とりわけ宗教者には問われています。

その特集の中に「輪廻の説と進化論」と題する、花園大学教授佐々木閑氏と東京大学大学院教授佐倉統氏

の対談があります。その最後の小見出しは「答えないという答え」となっており、佐々木氏は「…（前略）もともと仏教は一人一人の生き死にの問題に関して、それだけを突き詰めるもの。社会の動きをどうしようとか、人類の平和に貢献しましょうとか、そういう宗教ではありません。関わってはいけないことがたくさんあるのです。」

これを読んで私は仏教系大学ではそんな風に教えているのか、私のまわりの多くの住職も同じではないかと思いました。

私の手元に『現代に生きる宗教者の証言』（新日本新書）という本があります。これは一九六二年に結成された日本宗教者平和協議会が六年間の活動の一つの総括として、アメリカのベトナム侵略戦争のまっただ中に出版したものです。初代理事長の北法相宗清水寺貫主大西良慶師が序文の中で「正義にたつか、時の流れに黙従して行くかは、日本の宗教者の前に横たわっている今日の大問題であります。」と記しておられます。日本宗平協の機関誌は『宗教と平和』（月刊）です。私はそこから多くのことを学んでいます。

原発については、昨年末、財団法人 全日本仏教会

は『原子力発電によらない生き方を求めて』という宣言をだしました。

わが国が原爆の唯一の被爆国であり、全日本仏教会は仏教精神にもとづき世界平和の実現に努めたこと、その一方でもつと快適に、便利にと欲望を拡大してきたことの陰に原発の不安と処理不可能な放射能廃棄物を生みだし、未来に問題を残したことを反省し、「自然の前で謙虚である生活の実現にむけて最善を尽くし、一人ひとりの『いのち』が守られる社会を築くことを宣言いたします」と。

### わたくしの生きた時代を書く

「衣の下に鎧」という言葉がありますが、今の私の姿は「社会科学に衣」のようなものです。今さら生き方は変えられませんし、悔いもありません。七〇歳代も後半に入り、まとめの仕事に『私の生きた時代』を書いていくところです。

もの心がついた頃は太平洋戦争直前でした。山本五十六元帥（海兵三十二期）が、郷土の英雄としてもてはやされていますが、愛媛県出身の海軍大佐、水野広徳（海兵二十六期）のように退役して戦争に反対した

のではなく、米英との戦争は避けたいが、中国への侵略は肯定していました。山本五十六に関する「神話」も正して行きたい。また、日本の宗教教団の戦争協力の実態や戦後の責任のとり方についても記録したいと考えています。

日本国憲法第九条とは全く相反する日米安保条約のもとで、日米軍事同盟はますます強化されつつあります。私は日本平和委員会の一員として、ささやかながら抵抗してきました。「日米軍事同盟絶対論」も一種の「神話」です。軍事同盟はいまや過去の遺物です。非同盟の日本の未来に一人でも多くの人が展望と確信をもっていただけ願っています。

（文責・吉田武雄）